



コンテンポラリーダンス照明3

新年、明けましておめでとうございます。今年も、どうぞよろしくお願いたします。

前回のルーシー・キャター氏に引き続き、この回でも、ここ20年の間にバレエやコンテンポラリーダンス界で名を上げて来た照明家、ガイ・ホー氏をご紹介したいと思います。

ガイ氏のコンテンポラリーダンスの照明は世界中で見られています。彼がコラボレーションしている振付家は、ヘンリー・オグイケをはじめ、クリストファー・ブルース、ラファエル・ボナチェラ、ショバナ・ジェヤシン、マーク・ブルース、ベン・ライト、オーサー・ピタなど、数えきれないほどです。

彼の照明は、こういうスタイルです、という見た目の型をもちません。照明家なら誰でもそうかもしれませんが、公演のコンセプトによって、照明は変わってくるのが普通です。よく好んで使う色、エフェクトはあるかもしれませんが、なるべくマンネリ化しないように新しい表現に挑戦する人が、多いのではないのでしょうか？

では、ガイ氏はいつもどのように照明デザインに取り組んでいるのでしょうか。彼の照明チーフを長いこと務める、フリーランサーのバリー・アボッツ氏に伺いました。

バリー「ガイは、一灯一灯の照明がどの角度で、ステージのどこに正確に落ちて、どのように見えるか、完璧に把握しながら、仕事を進めます。同じ灯体を他のエフェクトで使い回すということはしません。照明プランを描くとき、CADやVectorworksを使わず、CorelDrawという3Dのプランを作成できるソフトウェアを使って精密に彼の思い描いているものを再現します。

彼が『Assassins』という公演の照明を行ったときも、そのソフトウェアで正確に角度と高さを計算し、セットのありとあらゆる隙間から、照明を通過させ、アメリカの国旗を舞台の床に描くデザインをしました。どの劇場に行っても、特定の高さ、位置、角度に、特定の灯体を吊れば、彼が想像している絵が必ずと言っていいほど、忠実に再現できるような照明プランを書いているのです。だから、彼のプランは信用できるし、ここまで精密だと、吊り込みが大変だと思われるかもしれませんが、逆にツアーしやすい信頼できるプランなのです。

ツアーの際に、彼（またはバリー）が必ずすることは、それぞれの劇場のディマーのカーブの違いと、プロポーションの修正で

す。一度、行ったことのある劇場の場合は、前回に卓でショーファイルにセーブした、カーブを呼び出して、再活用します。初めての劇場では、望ましいカーブが見あたらない場合は、自分で好ましいカーブを作ります。それぞれの灯体のプロポーションも、距離、灯体の種類、ボルテージの違いによって、ディマーパッチのページで修正します（ツアー卓で）。

彼はタングステンが好きですので、ムービングを使うときもタングステンのものをよく使います。色は基本ほとんどが、生か、カラーコレクションのみですが、公演の種類によっても異なります。

彼と仕事を何年も供にしてきましたが、繊細で、精密な表現力、照明の美しさにはいつも感心させられます。彼は、Royal Opera HouseやRoyal National Theatreなどの大きなプロダクションも手掛けますが、小さなプロダクションも手掛けます。どんなスケールでも、手を抜かず、事前に劇場に行き角度の実験をしたり、全力でプロダクションに臨みます。人としても、とても尊敬できる方です。」

私は、一度だけガイ氏にお目にかかったことがあります。見た目はとてもファンキーな、

カリスマ性漂う、面白そうなおじさまでした。髪の毛がオレンジに染められ、ビビッドに明るい、オレンジのスポーツジャージを上下で着ていらっしやっただのを覚えています。人は本当に見た目によらないな、と彼の繊細な照明を見ながら、頭の片隅で思いました。



Mischief



Frontline



Assassins